



# 平和学がわかる。



用意に現る  
平和の  
風景

Column

## 広島市立 己斐小学校

郷心地から西北約3キロに位置する私の母校。1951年度の5、6年生が受けた被爆体験の文集が50年ぶりに発見され、平和学習に活用しているようだ。私もこの学校で、有形無形の平和教育を受けて育った。己斐小の創立120周年記念誌(1994年発行)には、原爆投下の日から救護所となった経緯や「8月8日——死体処理用として下の運動場に縦2メートル、長さ20メートルの線を7箇所使って、学校給食用の薬一万束を使用の予定」という当時の校長の記述が載る。結局、3日間かけて搬出した800の遺体が10日の昼すぎより火葬に付された。この話は祖父から伝え聞いていたが、後年その凄惨な光景を描いた絵本『広島原爆』を通じて、グラウンド脇の体育用具倉庫が「戦争中は訓練用の兵器庫に使われていたことを知る死者たちの無念の思いが今さらながら身にしみたのである。

絵本『広島原爆』(藤原正幹、西村英男著、福音館出版)には、己斐小学校での被爆者火葬の場面が描かれている。



ジェノサイドの恐怖  
もちろん「正義論」にもいくつかの限界がある。冒頭で引いた公開書簡が示すように、いったん始

まった戦争の報明に終始する言論に走る傾向がその一つ。また、戦争責任や戦後処理の正義(戦争の後の法) [jus post bellum] が顧みられざる点も否定できない。これを克服するには、現場に身をさらす「エクスポージャー」という平和学の方法を活用するともに、責任の所在および程度の「判断

が求められてくる。さらに「戦争に対する法」として「ジェノサイド」(集団殺戮)を止めさせるという理由が持ち出されることもある。一見もっともな名目だが、この単語の使用については警戒を要する。なぜなら、実際の死者は一人ひとり別々の名前と身体をとなえた人間であるのに、

この表現では死者が数値に還元されるからいがあるから。その難点を詩人の石原吉郎はこう書いていた——「ジェノサイドのおそろしさは、一時に大量の人間が殺戮されることにあるのではない、そのなかに、ひとりひとり死がないうというところが、私にはおそろしいのだ。……死においてただ数であるとき、それは絶望そのものである。人は死において、ひとりひとりその名を呼ばなければならないものなのだ。」(『戦争と死』、ちくま学芸文庫、九頁以下)

また戦争の報明に終始する言論に走る傾向がその一つ。また、戦争責任や戦後処理の正義(戦争の後の法) [jus post bellum] が顧みられざる点も否定できない。これを克服するには、現場に身をさらす「エクスポージャー」という平和学の方法を活用するともに、責任の所在および程度の「判断



AF7WWP  
アブガニスタン空爆。空軍がタリバンに文化財をカブール北部爆撃攻撃する。2001年10月。